

2014年 冬号

第84号

僧伽編集委員会

〒921-8031
金沢市野町2丁目32-4
徳法寺内
TEL (076) 241-5219
題字 本多 千翠

僧 伽

印度・西天の論家
中夏・日域の高僧
大聖興世の正意を顕し
如来の本誓、
機に應ずることを明かす

『教行信証』 行巻



『教行信証』
親鸞聖人の主著。
教巻、行巻、信巻、
証巻、真仏土巻、化
身土巻の本巻と末巻
の六巻からなる。

日本ブームの先に

徳法寺 杉 谷 浄

上の写真は、今から三十年程前に
バンングラデシユの街角で見か
けた怪しげな風景です。今でも何
の店なのかは不明ですが、玄関に
鳥居があるというのは日本では
見かけません。これだと、中にい
る人が神様になってしまします。

当時から、高度成長を続けてい
た日本を過大評価する風潮は一
部に見られていましたが、近年、
アニメを代表する日本文化や食
文化は、世界的なブームになって
います。「日本のものは何でも
かっこいい」という「クール・ジャ
パン」という言葉に自尊心をくす
ぐられていられる方も少なくないの
ではないでしょうか。

しかし一方で、日本の文化が世
界に広がるということは、日本の
文化が日本のものではなくなる
ということを意味しています。
「柔道」が「JUDO」になった
ことを見てもわかります。テレビ
で紹介される世界各地の「寿司」
はすでに「SUSHI」となってい
ます。太巻のてんぷらや、チヨ

コレートソースをつける寿司を
見て「これは寿司ではない」と
言ってもしかたがありません。逆
に中国から伝わったラーメンや、
インドのカレーは、今では日本食
になっていくのですから。

文化は他の文化と融合し、化学
反応を起こして、原形からは想像
もつかなかったような新しい形
へと変化していくのです。

仏教も同じです。インドで生ま
れた仏教は、中央アジアや中国を
通すことで大きく変化し、更に日
本でお釈迦様のころの仏教とは
全く違う姿になりました。この
ために、日本の仏教は本当の仏教
ではないと非難された時期もあ
りました。しかしこれは日本の
ラーメンは中国のラーメンとは
違うから偽者だということと同じ
で、見当はずれの見方なのです。
日本文化も海外で化学変化し、
日本の色がなくなる中で、どのよ
うな新しい文化が生まれるのか
楽しみです。

柳井由美



主婦の私が動物写真家を目指して…

私は主婦です。どこにでも居る普通の主婦。その私が抱いた夢、それは動物写真家になること。それも世界の野生動物の姿、その一瞬をカメラで切り取って、発表していきたい…主婦が目指すにはあまりに壮大で突飛な夢ですよ？それは遡ること十数年前、主人が発した一言によって始まりました。

『ねえ、今度アフリカに行かない？』元々、秘境と呼ばれる場所へ行くのが趣味であつた我ら夫婦、主人の何げない一言からケニア旅行へ行くことになりました。初

なければ!!一念発起した私は知人から紹介してもらつた写真家に撮影方法を習い、カメラも新調しました。

めて訪れるアフリカの大地は雄大で、何もかもが新鮮な感動で溢れていましたが、何より心を揺さぶつたのは、厳しい自然の中、懸命に生き抜いている野生動物の姿でした。懸命に生きる動物の姿とはなんと気高く美しいのでしょうか!!『この一瞬の姿を切り取りたい。彼らの美しい姿を写真として残したい』いつしか私の心にはそのような気持ちが芽生えていました。が、しかし、残念ながら私には写真に関わる知識や技術がまったくなく、満足のいく写真は撮れませんでした。写真技術を学ば

た方々がおつしゃいました。『アフリカまで行く機会なんて一生ないだろうから、写真で見せてもらえると嬉しい』そうか!!アフリカだけではなく、世界の野生動物の姿を写真に収め、皆さんに観てもらえたら…:いつしか私はそう思うようになつていきました。それが私の使命のような気がして。

二〇〇三年、再度サバンナの地に降り立った私は必死にシャッターを切つていました。毎日早朝六時から夜七時まで続くサファリドライブは想像以上に過酷で、冷暖房のないジープ内の気温は十度から四十度近くまでも変化し、容赦なく私たちの身体を苛みます。一日中車を走らせても動物たちに出会えない時もしばしば。サバンナは動物の神聖な世界、人間の領域ではないのです。帰国の折にはもう体力の限界が。こうした十日間を経て、納得行く作品を手にするに至りました。技術的にはまだまだなのは言うまでもありませんが、自分なりに彼らの一瞬を切り取れた手ごたえを感じました。

アラスカでは、ヒグマの生息地に分け入り、ヒグマがサケを獲る一瞬の撮影に成功しました。子供が生まれ、五歳になった頃から子供と一緒に行く撮影旅行がスタート。昨年はアメリカのイエローストーン国立公園へ。レンタカーで回りながら絶滅危惧種であるバイソンやコヨーテを撮影しました。今年、スイスではトレッキング中に断崖絶壁に暮らすアイベックス(ヤギの一種)の群れに遭遇、その姿を撮影しました。

と名乗るにはまだまだです。主婦がそこまでして何にならと思われる方もいらつしやるかもしれません。しかし、私は目指したいのです。主婦だから無理、この歳だから無理。そんな果てしない夢は叶うわけがない…:そうやって自分に足かせを付けてしまつたら何も始まらないと思うのです。主婦の私が抱いた夢はほんの少しだけ形になりました。『夢は叶えるためにある』それが私のモットー。夢はまだ途中。世界の野生動物の姿を皆さんにお届けするということを自分のライフワークとし、今後も活動していきたいと思ひます。

やない ゆみ

一九七一年 大阪生まれ

一九九九年ケニア旅行で野生動物の姿に感動、その美しい姿を残したいという気持ちから写真を学ぶ。コンテスト入賞を機に、当時在任していた台湾で写真展を開催、日本でも写真集『サバンナのある日』を出版。石川県に移住後も写真展を多々開催している。

<http://yumi-yanai.com/>

「御絵伝」でたどる 親鸞聖人のご生涯

(21)

第二十一回目は「葬送茶毘」です。

親鸞聖人が亡くなられたのは、弟の尋有僧都のお住まいであった善法院です。

善法院のあった場所については、東西本願寺でそれぞれ別の場所が考えられています。東では柳馬場御池上ル虎石町、西では西ノ京万里小路とされています。いずれにしても、比較的京都の町なかになります。そこから賀茂川を渡った東山の麓にある、鳥辺野という所の南にあった延仁寺まで柩を輿に載せて運びました。これが絵の右側になります。

又は宝来、つるそめと呼ばれていた人々です。古代から中世の神社で、様々な雑用をしていた人のことを神人といいました。社地の見回りや祭祀の警備なども行っていたため武装していることも多く、僧兵のように暴徒化することもありました。また神人の中には芸能者・手工業者・商人などもおり、後にこれが発展して商工・芸能の座が多く結成されるようになります。

この神人の中でも身分の低い階級が犬神人と呼ばれていました。社内の清掃や山鉾巡行の警護のほか、京市内全域の死穢の清掃・葬送を行う特権をもっていました。この『本願寺聖人伝』は犬神人が描かれている最古の絵巻といわれています。これ以降、東西本願寺門主の葬式には、犬神人が祇園祭礼と同じ服装で先導を務め、茶毘に関わる仕事を果たしていました。



大谷に建てられた親鸞聖人のお墓

絵の左側は茶毘の様子です。火葬は一晚に渡って行われ、多くの人々に見守られながら行われていた様子がうかがわれます。当然、多くの薪が必要であるために、ある程度経済力が無ければ火葬にすることはできませんでした。左にいる白い装束を着て青竹を持つているのが、火葬の専門職である火葬人です。お墓は鳥辺野の北のほとりの大谷につくられました。左の絵がそのお墓です。現在、西本願寺の西大谷にこの墓が再現されており、自由に参詣することができるようになっています。(浄)



真宗人物伝

第三十三回

常德寺 西山 彰

大谷光演

小松市や能美市の旧家の仏壇の上などに、「愚峯」という署名のある書をよく見かける。「愚」という字が、「呂」のようにも見えて少しわかりづらいのだが、これらは本願寺第二十三世大谷光演師の手によるものである。

師は俳号を「句仏」と名乗られたため、「句仏上人」の名で親しまれている。正式な尊称は、「彰如上人」である。このお名前はお内仏の脇掛け（御本尊の向かって右の掛け軸）の中によく見かけるので、一度見ていただきたい。

句仏上人のことを語るうえで、「句仏事件」というあまり名譽でない事件のことを避けるわけにいかない。

師は、利権目当ての側近・

取り巻きの甘言に乗せられて、朝鮮での鉱山事業など営利事業に手をだし、失敗した。その結果、多額の負債を背負うこととなり、大正十四年五十歳で法主の座を追われることとなった。

それにもかかわらず、いまだに「句仏さん」と親しみを込めて呼ばれるのは、芸術家特有の純粹でまっすぐな気性によるものではないかろうかと想像する。

確かに句仏事件は、大谷家の引き起こした乱脈事件として語り継がれている。が、その動機は疲弊した本願寺の財政を立て直すことが目的だった。そもそも東本願寺は江戸時代には徳川家に保護されてきたこともあり、明治維新を迎えて微妙な立場に置かれていた。

明治政府は、維新以来、多額の献金の要求や北海道開拓など無理難題を次々に押し付けてきたのだ。そんな中、光演師は父大谷光瑩師から、明治四十一年に法主の座を引き継いだ。

若干三十三歳の法主に課せられた任務は、何をしても多額の負債を返済することであった。おりしも教団は宗祖親鸞聖人の六五〇回忌御遠忌を控え、師は就任早々全国巡教、募材行脚の旅に出かけなくてはならなかった。苦勞の末、師は借金を完済したばかりか、大門や白書院など本願寺内に名建築をも完成させたのだ。

現在も師の書が御門徒の家に多く残っているのは、この全国巡教の時のものであろうと思われる。若き法主の情熱とそれを支えた北陸門徒の御苦勞の跡がしのばれる。

一方で師は文化人として才能を発揮し、特に俳人として、正岡子規の影響を受

け、「ホトトギス」誌に投稿していたことは有名である。師と仰ぐ河東碧梧桐、高浜虚子らを、本願寺近くの庭園、枳殻邸に招き句会を催すこともあった。しかしのちにその影響から脱し、日本俳壇界に独自の境地を開いたといわれている。

師は昭和十八年二月、六十八歳にて生涯を終えた。句仏とは、「句を以って仏徳を讃嘆す」の意であるが、残された二万句もの俳句がそのことを如実に物語っている。

代表作は「勿体なや祖師は紙衣の九十年」。この句は宗祖親鸞聖人が、ご苦勞の多い一生を終えられたことを詠んだものである。



徳法寺の

ホームページが
できました

今更ながら、ホームページを作りました。「僧伽」のバックナンバーや報恩講、春秋彼岸の案内、お講の案内、学習会のレジュメ、交流広場などを載せています。アドレスは
<http://kokuhou-ji.com/>
です。是非覗いてみてください。

杉谷浄の

ラジオ案内

二月四日(火)
三月四日(火)
四月一日(火)
五月六日(火)
F・M・N・I(七十六・三MHz)で午後一時半から一時間放送します。番組名は「生活一番シャトル便 住職のよもやま話」です。再放送は放送日の週の土曜朝六時からです。インターネットでも聞けます。

本の紹介

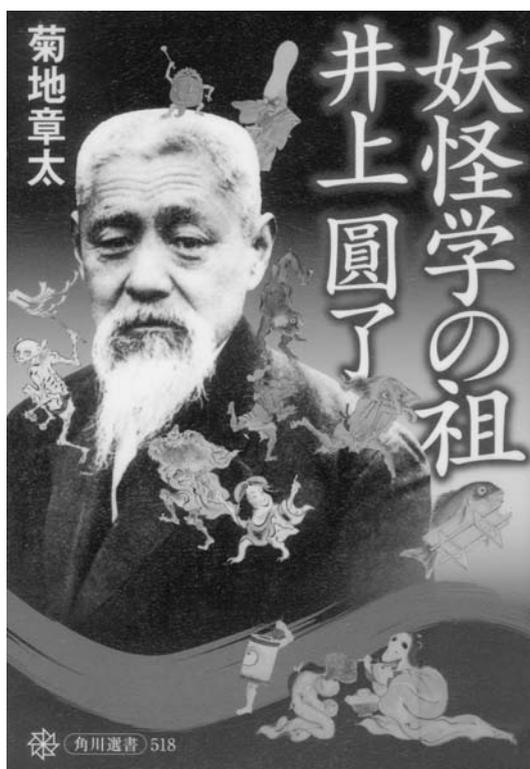
『妖怪学の祖 井上圓了』

菊池章太

発行 角川学芸出版

定価一七〇〇円＋税

井上圓了は明治時代に活躍した宗教家であり、哲学者であり、教育者です。生まれは新潟県長岡市にある真宗大谷派寺院の慈光寺です。当時は江戸時代に幕府の庇護を受けていた仏教が、一転して廃仏毀釈の荒波に揉



まれていました。これを取り切るために本願寺は人材育成の学校を京都に創ります。この学校の学生だった圓了は、東京に東京大学ができるのと、東京大学予備門に本願寺の留学生として派遣されます。予備門とは大学に入るための準備をするために創られた学校です。高等学校が無いのいきなり大学ができたものだから、このような学校が必要になっていったのです。

この後、東京大学に入った圓了は、僧侶として初めての学士取得者となります。卒

業後、文部省への推薦を断り本願寺に戻ろうとしますが、大学で学んだ知識を生かせるような場所に就くことは出来ませんでした。封建的な風土の宗門では、小さな寺の生まれのものが、重要な役職に就くことはできなかったのです。宗門に見切りを付けた圓了は、自分で学校を創ることにします。それは仏教ではなく哲学の学校でした。西洋哲学を学んだ圓了には仏教はすでに過去のものに見えたのかもしれない。

圓了は「哲学館」という学校を創り、後進の育成に努めます。これが現在の東洋大学です。私学としては東京専門学校（早稲田大学）、國學院（國學院大學）と並び最初に文部省に認定されている学校です。ここで圓了が教えていた学問に「妖怪学」があるのです。当時の日本には多くの妖怪がいました。とは言っても、実際にいるというのではなく、いると信じられていたのです。これらの妖

怪を全国津々浦々まで、自分の足で調べて回り、一つずつ丁寧迷信であることを証明していったのです。この結果、妖怪大辞典が出来上がりました。圓了は調べた妖怪を細かく分類し、学問として体系化したのです。圓了は生涯寺に帰ることはありませんでしたが、仏教の重要性は再認識し、仏教を西洋哲学概念によって理解しようとはしました。その試みである『仏教活論序』

(浄)

平成二十六年 年忌法要の案内

- 一周忌 平成二十五年死亡
- 三回忌 平成二十四年死亡
- 七回忌 平成二十年死亡
- 十三回忌 平成十四年死亡
- 十七回忌 平成十年死亡
- 二十五回忌 平成二年死亡
- 三十三回忌 昭和五十七年死亡
- 五十回忌 昭和四十年死亡

映画の紹介

ライフ・オブ・パイ
虎と漂流した二二七日

常德寺 西山 彰

以前このコーナーで、オカミと羊が嵐の夜に出

会ったという絵本を紹介したことがあった。それは、

飢えてさまよう二匹の動物の間に、奇跡的な友情が芽生えるという話だった。

巷で評判の『ライフ・オブ・パイ』虎と漂流した二二七日』という映画も、この類のものだと思っていた。つまり、オカミと羊を、虎と人間に置き換えた話だとばかり思っていたのだ。

しかしこの映画を見終った時、その予想は、いい意味で二重三重に裏切られることとなった。

アン・リーという台湾の監督によるこの作品は、テーマの深さと現代性、映像美、脚本のどれをとって

も完璧な映画といえる。あえて言うなら、「虎と漂流した二二七日」という副題が、唯一の弱点と言えるかもしれない。この副題を見れば、誰しも究極の状況での虎と人間の奇跡的な友情物語を想像するだろう。しかしこの作品は、そのような単純なディズニークラスの対極にあるもの

だ。ちなみに主人公の名は、パイで円周率を表している。わたしなら、「パイ(π)は無理数であると同時に、超越数である。」という主人公の言葉をこの映画の副題にしたかもしれない。(もちろんこれではだれも映画館に足を運ばないだろうが。)

物語は、ある作家が一人のインド人、パイのもとを訪ねるところから始まる。作家は、このインド人が若いころ経験した奇妙な体験を取材し、小説にしようとしていた。パイは、この不思議な話を聞けば、君も神を信じたくなるだろうと前置きし、ゆつくりと、自分と虎との話を始めるのだが……。これ以上はやめておこう。

ぜひこの映画を見ていただきたい。これはすごい映画だ。

幻想的でありながら、きわめて現実的である。そして食物連鎖という古典的なテーマを扱いながらも、魚や肉に感謝せよというような、きれいなことばで済ませるようなことはしない。あえて言うならば、神は存在するのかもしれない古くて新しい問題を扱っているのである。

しかも、最後に思いもよらないどんでん返しがあり、エンターテイメントと

しても十分楽しめる。まったく泣かせるくらいよくできた映画なのだ。「虎と漂流した二二七日」という副題が唯一の弱点と述べたが、もしかしたらこのことすら、製作者側の周到な計算だったのではなからうか。

この映画に裏切られ、どんでん返しを食らわされる観客は、同時に平和で予定調和的な浅はかな人間理解からも見事に裏切られることになること請け合いです。

◎お講 (石坂同信会主催)

毎月二十一日

午後七時半より

講師 三月 杉谷 浄

四月 佐藤 哲

* 一月・二月は天候が悪いのでお休みします。三月に行っていました懇親会は彼岸中日と重なるため取り止めとします。

◎春彼岸

山口哲司イラスト展

三月十八日(火) から

二十四日(月) まで

各寺のご案内

◆常德寺

金沢市寺町

五丁目一番二九号

☎二四一―二六四九

◆徳法寺

金沢市野町

二丁目三二―四

☎二四一―五二一九

編集委員

西山 彰 (常德寺)

杉谷 浄 (徳法寺)



午後二時より
講師 藤原 正洋氏

◎春彼岸中日及び

永代経法要

三月二十一日(金・祝日)